

## 京極派歌論における「悟り」の意味

和氣 キャロライン 晃子

「力をもいれずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも哀れと思はせ、男女の仲をも和らげ、猛き武人の心をも慰むるは、歌なり。」和歌の根底であるこのことばには、「自己」である歌人、と「他者」である享受者の存在が欠かせない。それは、和歌について、自己の心のうちを他者に伝え、他者のこころが動かされることが目指されているからである。しかし、「古今和歌集仮名序」が描く、自己と他者とを分ける二元的な世界観は未完成であると考えられる。ここでは、他者のこころが動かされたあとに、何を悟りえるのかが、示されていないからである。自己と他者とを分ける境界線は、そもそも意識の世界では仮構であり、それを識ることこそが、悟りなのである。

その点で、数世紀をへて、京極派歌人、京極為兼は、仮名序で示唆されている理念を発展させることによって、彼の歌論テキスト「為兼卿和歌抄」でこの答えを示している。「境」、「相応」、「なりかへり」といった、自己と他者のあいだの境界線を観照し、それを超越する新しい歌の詠みかたが説明されているのである。これは二元的な世界観を離れ、つまり自己と他者を超越した一体性を、意識が志向する絶対的境地のなかに求めつつも、現象世界の二元的な現状をうけいれて生きるという、悟りへのアプローチを追求している。

先行研究はすでに多数書かれており、いずれも、和歌伝統が内包しているこうした方向性を肯定しつつも、曖昧な定義のなかに議論を回収してしまい、わずかに小西甚一、井口牧二、岩佐美代子の論が抜きん出ているのみである。三氏に依拠しつつも、わたしは、京極派の歌論や和歌そのもののなかにはっきりと悟りの意味があらわされていると主張したい。

本発表はスタンフォード大学大学院に提出した、博士論文の第1章、とくに為兼の歌論と和歌に関する議論にもとづいている。

## The Meaning of “Enlightenment” in Kyōgoku School Poetics

Wake Caroline Akiko

“It is song that moves heaven and earth without effort, stirs emotions in the invisible spirits and gods, brings harmony to the relations between men and women, and calms the hearts of fierce warriors” (“Kana Preface,” *Kokin Wakashū*, trans. Helen McCullough). In these words which comprise the philosophical foundation of waka poetry, the presences of the poet as “self” and audience as “other” are crucial: waka poetry is the means by which a poet moves the hearts of others by conveying the depths of their own heart. However, I believe that this dualistic worldview of “self” and “other” presented by the “Kana Preface” is also incomplete, since it does not suggest what truth could possibly be discovered after the hearts of others are moved. The boundaries separating “selves” from “others” are, in the first place, fabrications of this conscious realm, and to realize this truth is enlightenment itself.

Centuries later, the poet Kyōgoku Tamekane of the Kyōgoku School provides an answer in his poetic treatise *Tamekanekyō wakashō* by developing the ideas suggested in the “Kana Preface.” He discusses new ways of composing poems involving “kyō,” “sō’ō,” and “narikaeri” that encourage the poet to contemplate and transcend the boundaries between “self” and “other.” This is an approach to enlightenment wherein the poet distances themselves from a dualistic worldview—in other words, seeks a unity transcending “self” and “other” in the absolute realm where the consciousness muses, while continuing to live in acceptance of the dualisms of the phenomenal world.

Numerous studies are already written about Kyōgoku School poetics, and though they each affirm this general direction of waka discourse, they also mire their arguments in ambiguous definitions. Only a few theses by Konishi Jin’ichi, Iguchi Makiji, and Iwasa Miyoko rise above this. While relying upon the arguments of these three scholars, I wish to strongly argue that the meaning of poetic enlightenment is clearly expressed in the poetics and poems of the Kyōgoku School.

This presentation is based upon the first chapter of my Ph.D. dissertation submitted to the graduate school of Stanford University, and especially focuses on my arguments about Tamekane’s poetry and poetics.

京極派歌論の革新性を理解するために、まず数世紀遡って、古今和歌集仮名序について考えたい。紀貫之は人の心を種にたとえて、それから芽吹く言の葉が和歌を創ると説明している。万物が周囲の世界を感覚して、それに対して起こす想いを歌として奏でる普遍的な過程があるように、歌人も同じく和やかな気持ちを心に芽吹かせ、これを言葉に込めることで、「自らの心を他者に伝えて、その心をも動かす」という、重大な役割を担っている。

実は仮名序の世界観には、歌人も、歌の対象も、歌の享受者も、それぞれが互いに孤絶しているという暗黙の前提がある。仮にこれを「自己」と「他者」の区別と言おう。古今集の世界観ではそれぞれの間に境界線があり、和歌を用いて感情を表すことで感覚する世界の違いを知らせ合うのである。しかし、京極派歌論には、中世仏教の理念を用いた、この決まりきった世界観を覆す、非常に興味深い発想があるのだ。京極派歌人は「自己」と「他者」の区別を超えた境地を経験するべく歌の対象を見つめ、想像界において対象と一体になることを目指し、言葉を絶する一体性を自ら経験しようとする。この意志にもとづいて、二元的な世界観を超える認識が一瞬にして垣間見られた後で、その過程を和歌で表現しようとするのである。

京極為兼の歌論「為兼卿和歌抄」には歌を読む過程を説明する三つのキーワードがあり、これらは以下のようにすでにある程度入念に研究されている。

- 最初に「境」とは、五官と心によって感覚される対象をさす。久松潜一氏と土岐善麿氏は空海の「文鏡秘府論」に、小西甚一氏は天台仏教の「止観」に、そして岩佐美代子氏は法相唯識論の「唯識無境」から為兼が「境」の概念を借りたのではないかとする。
- 次に「相応」とは、歌人と対象の心が感応し合い、歌人が五官を通じて識る対象よりも、もっと深く対象を理解する過程を指す。歌人は認識できる限りの対象がはたしてその全てなのかどうかを問うのである。為兼の発想源として、井口牧二氏は空海の「声字実相義」に説明されている「三密相応」を指摘し、岩佐氏は法相唯識論における「相応」を挙げている。
- 最後に「なりかへり」とは、歌人が対象との境界線を越えるために、自ら対象と一体になろうとする過程であり、為兼の歌論において私が新たに注目するものである。複数の研究者が、「真如」や「一如」のような仏教に由来する用語を使って説明を試みているが、概して本質をとらえていないように思われる。

しかし、私の見るところ、小西、岩佐、井口の三氏だけは、この「なりかへり」の次に目指されるべき過程があると考えている。それは、歌人が対象と実際に一体性をなし、二元的な世界観を超え得るその瞬間のことである。この経験は一般に「悟り」と呼ばれるものである一方で、三氏はそれぞれの言い方で京極派のさらなる革新性に触れようとしている。しかし私がここで強調したいのは、経験し得た歌人は、言葉を絶する体験を言葉で表現しようとするジレンマに陥るということである。存在を定義づける境界線が実は仮構であったと気づきながらも、生きるこの現世では存在にとってどうしても欠かせないからだ。本発表ではこのような知見を、「悟りへのアプローチ」という見方で統合し、従来の研究に今後の方向性を与える。

#### 文献一覧

井口牧二「為兼歌論と仏教思想」『国文学研究』早稲田大学国文学会、1980.10、35-44 頁.

岩佐美代子「為兼の思想—為兼歌論と唯識説」『京極派和歌の研究』（改訂増補新装版）所収、笠間書院、2007、17-70 頁.

小西甚一 (Konishi Jin'ichi) "Tamekanu and Hanazono Tennō." *A History of Japanese Literature, Vol. 3, The High Middle Ages*, translated by Earl Roy Miner, Mark A. Harbison, and Aileen Patricia Gatten, Princeton UP, 1991, pp. 393-416.

土岐善麿「『為兼卿和哥抄』解注」『新修京極為兼』所収、角川書店、1968、155-202 頁.

久松潜一、西尾実『歌論集・能楽論集』日本古典文学体系第 65 巻、岩波書店、1961.

